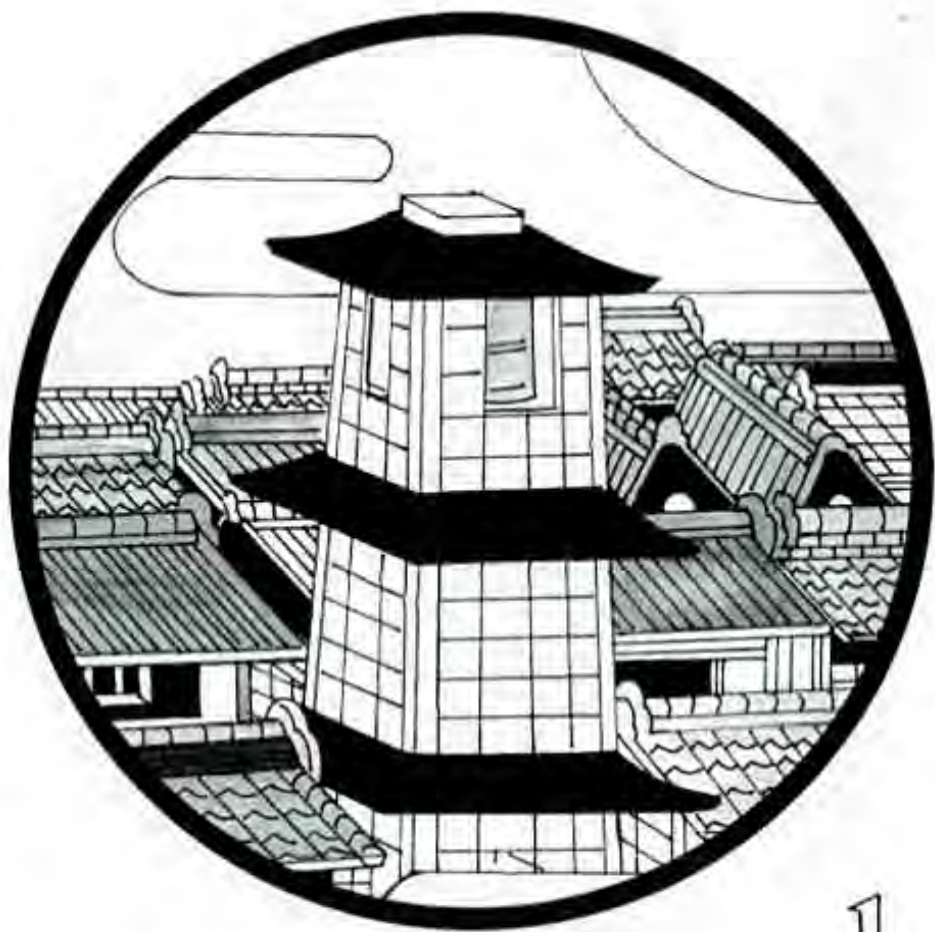


平版 29号(1月5日发行) 32开(1日14卷发行)  
第17期(1月14日出版) 95号

# 風土



田や畦やけふ卒業の木綿服

(句集『含差』より昭和三十年作)

略年譜によりますと、昭和十五年に桂郎師の長女路子が生まれ、翌年の十六年には亡くしています。そして十一月六日には長男徹郎が誕生します。この時には知る由もないのですが、昭和五十年の同じ日に桂郎師は逝きました。さて昭和三十年ですので、徹郎さんの中学卒業でしょう。「田や畦や」は家のまわりの景色です。この景色の中で徹郎さんが遊び育ちました。もっといい服を着せてあげたい気持ちを胸に、すすすす育ってくれた我が子を晴れがましく思うのです。

遠蛙酒の器の水を呑む

(句集『含差』より昭和三十年作)

この句は桂郎師の代表句のひとつです。私は初心の頃、わざわざ「酒の器」で「水を呑む」のが解りませんでした。あとでその頃の桂郎師の境遇を知り納得しました。昭和三十年、結核で肺を患い四畳小屋に臥せった生活をしています。飲酒を禁止され、せめて愛用の「酒の器」で水を飲み酒の味を想い起しているのです。

椿ともる一枚ガラスに誕生日

(句集『有今』より昭和五十二年作)

器師の誕生日は昭和二年二月二十二日です。すべてが「二」で統一されています。さてこの句は「一枚ガラスに」で軽く切れます。句意は「ガラス戸の向こうに灯るように椿が咲いている。春先なので花の数は少ないが、私の誕生日を暖かにしてくれる色だ。」というところでしょう。銚職の手を休めてガラス戸越しに椿を見遣っている器師がいます。以前の「寒椿四五歩の距離の遠かりき」など、「椿」は器師にとって大事なモチーフになっています。

年酒酌む口中に梅ひらくごと

(句集『有今』より昭和五十三年作)

「年酒」は新年に年始回りの客にすすめるお酒です。今、客とお節を肴に酌み交わしています。その酒の味と香りが口の中に広がってゆくのを「口中に梅ひらくごと」とたとえました。大胆な比喻で意外性がありますが、「年酒」という「ハレ」なればこそ、梅の花の白さと気品のある香りが読み手を納得させます。この飛躍したことばの輪旋は器師の俳句表現の特徴のひとつです。

凜々々

南うみを

燕去ぬ筵に干魚反りかへり

だみ声のひとつ混じりぬ昼の虫

いま落ちしくわりん園丁より貰ふ

鬼の子の揺れゐる鯉の波のうへ

一刀に芋茎刈つたるしぶきかな

土塊を掘つて砕いて芋搦む

ほきほきと子芋孫芋はづしけり

髭ちよると子芋なにやらふぐりめく

葛もみぢ我楽多市の甕に垂れ

ましら酒丹後若狭と舐め比べ

かはらけのへらへら飛び神無月

にほどりのくるりくるりと沼の昼



# 竹間集

同人作品



垣を結ふ

浜 福恵

茶の花は桂郎の花垣を結ふ  
梵鐘一打余韻にゆめのはなわらび  
ぽつねんと霧の中より曙草  
つゆくさや沖の晴間の見えはじむ  
海平ら霧の峠を降り来て  
踏みでは踏みではゆく花野  
一本杉の空より釣瓶落しかな

小春日

門伝 史会

木犀の香に半眼の思惟仏  
爽涼や太極拳の空を蹴る  
果てしなく続く木道草紅葉  
秋桜十人十色の風ありて  
ど忘れを許し合ふ笑み帰り花  
山椒魚のぞく水底冬の鳥  
小春日や雀に残すパンの耳

「老樹」以後(二十三)

野沢しの武

コスモスの角を曲がれば千蔭の墓  
秋に憶ふガリ版刷りの同好誌  
最長は九十八齡 敬老日  
敬老会地平に湧きて入道雲  
二度かけて通せぬ電話秋深し  
亡妻の花瓶あれば野の草花を挿す  
島を去る海猫か一羽が空翔ける

秋うらら

鈴木 石花

開店に新酒振る舞ふ四斗樽  
椅子の無き銀座大通り秋暑し  
モンパリの偲ぶ碑のありあきつ飛ぶ  
矍鑠たる卒寿越す友酔芙蓉  
卒寿越す友に古稀の娘秋うらら  
初紅葉土産にドラム教習本  
聖職者の去りし教会黄落す

ふゆのはなわらび

岩木 茂

夜を待つ玉座がひとつ月見亭  
蕉翁の杖は細身に野分雲  
義仲寺の添水の音も遠くなり  
木曾殿に芭蕉の花の咲いてをり  
稲架解いて大敷網を間近にす  
雨ながらあたたかふゆのはなわらび  
かつと見開ひらく経文岩の石踏の花

郷の秋

小林 輝子

来い来いと去れと揺れ合う芒原  
国境うるし紅葉の芯なせる  
師の在さば素通りはせじ猿茸  
露天湯の月掬さむと蹠踉へり  
月の夜鬼剣舞の巨き影  
郷の秋問ひたげ叔母のデスマスク  
四方の山けふを限りと粧へり

十月桜

田村すゝむ

大空に散らばる十月桜かな  
酔芙蓉咲き継ぐ妻の十年忌  
十月の風に吹かれてボブ・デイラン  
水鳥は淋しき沼に又潜る  
身にしむや女が入る懺悔室  
コーヒーの注文マフラー取りながら  
坂の名の由来探しに木の葉踏む

# 山河集

同人作品



南うみを選

人影のやがて手を打つ冬の宮  
十二月八日手はポケットに入れたまま  
いてふ落葉拾ふは夢のあるしるし  
きりもみの喧嘩鴉や大枯野  
行き先は出てから決める小春かな

本間 羊山

戦争と農家の縁の衣被  
霧ごめに海軍橋と官舎山  
要港の桜千本紅葉かな  
敗荷の如き戦後を遠くにす  
軍艦の町の無口に時雨来る

福田 周草

句碑囲む松亭々と秋の声  
秋水の流れのやうに兄逝けり  
通夜終へて泊つる故郷の夜寒かな

落合 絹代

団子屋に寄るも目当てや石露日和  
コスモスの風の中より大男

溝蕎麦や角のとれたる沢の音森  
屋 慶基

吊橋に揺れを促す溪紅葉  
木の実落つ弾むも沈む訳でなく  
うたた寝の母置き去りに十三夜  
読み返す『風狂列伝』菊脛

下山田美江

入相の今日の音を打つ実紫  
竹筒の竹篋入れや竹の春  
月を待つ広間中の間奥座敷  
秋冷の石にこ糸ありおもひあり  
秋水に浮棧橋の嵩のあり



風薫る

鈴木庸子

巴里祭や土蔵に手回し畜音機  
遥拝の向きにとまりし赤とんぼ  
歩荷もう見えなくなりし花野かな  
めぐり来るものに忌日や虫の夜  
ウイスキー―眠らす森や水の秋  
読み終へて栞のいらぬ夜長かな  
つれだちて十一月の青柳寺  
境内に誕生水井戸帰り花



---

郵便受けにメモある名刺師走かな  
一つ押す訂正印や十二月  
動くものなき大寒の生簀かな  
抽出しにぬる蜜蝋や寒明くる  
フアックスのつまづいてゐる余寒かな  
躍り出るからくり時計春どなり  
現況と合はぬ公函や地虫出づ  
蝌蚪生るる池のくびれを陣として  
古井戸は城の抜け道亀鳴けり  
万緑へ打ち込む真田陣太鼓  
しなうことおぼえはじめし今年竹  
蛙句碑四十年や風薫る

初音

渡辺 やや

膝抱いて何もなき日や鳥渡る  
椅子ひとつ庭に運びて良夜かな  
縁側に座布団ひとつ十三夜  
手渡しの郵便の来て小六月  
侘助や箱階の小暗がり  
師走かなメモ一づ消し二つ足す  
エプロンを外しつ受くる年賀かな  
白足袋のこはぜピタリと寒に入る



---

げんまんの小指の細し冬つばき  
春浅し正座して見る地獄絵図  
聞いたよね今鳴いたよね初音かな  
夫在れば金婚式や朧月  
ふる里の桜情報追伸に  
石段を二段飛ばしに若葉風  
一輪車苗山積みに風五月  
子を発たす無人の駅や夏つばめ  
集落は今や七軒こぶし咲く  
梅雨晴れ間百年の樹のかぶさり来  
膝少し崩して待てり夏座敷  
竹皮を脱ぐや野太き声変はり

# 風土独語／南 うみを



十二月八日手はポケットに入れたまま

本間 羊山

「十一月八日」は、日本が真珠湾に奇襲攻撃をし、アメリカとの戦争が勃発した日です。その後の本土空襲、原爆投下、終戦へと続く軌跡の第一歩の日でした。作者は「手をポケットに入れたまま」その日を反芻しています。どのような思いなのかは「手」が如実に語っています。モノに語らせるのが俳句の基本です。

オーロラの緑広がる月の船

島 玲子

「オーロラ」は地球の南北極の百キロ以上の空に現れる美しい薄光です。その美しさは宇宙の神秘と言えるでしょう。ローマ神話の「曙の女神・アウロラ」にちなんで名付けたことが頷けます。作者はさらに、月明に包まれながら神秘的な世界にひたっているのです。この世のものとは思われぬ景を描ききっています。

敗蓮の如き戦後を遠くにす

福田 周草

季語を比喩に使うのは難しいのですが、戦後の混乱期をイメーヂさせるのに、「敗蓮」の在り様が大いに役立っています。なにか闇市の雑然とした世界が彷彿とします。そこを潜り抜けた作者に「戦後」は遠くなりました。

句碑囲む松亭々と秋の声

落合 絹代

「秋の声」は澄みきった空気を渡る葉擦れの音や水の音、鳥や虫の声など秋の気というものを感じさせる音や声を言います。作者は句碑を囲む松のすくとした佇まいに「秋の声」を聴いたのです。「松亭々」がこの句の世界を読む鍵です。

さはやかや鞍馬寺より貴船川

岡 尚

「さはやか」は秋の大気が澄んで、すがすがしくはつきりし方様をいい、気分としてもさっぱりと気持ちがいいです。鞍馬と貴船は京の奥座敷です。鞍馬の寺から山道を降りると貴船に出られます。初秋の風を受けながら降りると貴船川のせせらぎが聞こえてきました。おもわず「さはやかや」と声にだしたのです。

溝蕎麦や角のとれたる沢の音

森屋 慶基

「溝蕎麦」は水辺に群生する秋の植物です。夏の間しづきをあげていた瀬の流れが、溝蕎麦の茂りでゆるやかに変わったのです。その瀬の音を「角のとれたる」と表現しました。細やかな感覚で瀬の音の変化を捉えました。

竹筒の竹篋入れや竹の春

下山田美江

「竹の春」は秋になり竹が元気を取り戻した状態をいいます。この句は「竹」という素材だけで仕上げました。「竹筒」に「竹篋」、それを包み込む「竹の春」と、青々とした力強い世界です。

〈以下略〉

# 風土集

## 南うみを選



アイスランド

オーロラを見る船の旅月の道

オーロラに夜寝ずの番の立つらしく

オーロラの緑広がる月の船

一面のオーロラ見たし月の航

船旅を露けきものと思ひけり

鮫鱈のおはじき色の目玉かな

湯豆腐やくらりと揺れるまでを待つ

十二月些事も大事も暮れにけり

極月の声ぶつかりて売れてゆく

柚びとの今朝真つ新の頬かむり

アルバムに剥げたるあとや秋桜

秋晴れや干されて魚の目の並ぶ

新蕎麦や山襷を雲のぼりゆく

草紅葉投網夕日にひろごりぬ

阿南 島 玲子

秋田 本間 羊山

相模原 岡 尚

さはやかに鞍馬寺より貴船川

谷戸の日が磨くむらさき式部の実

池心に塔映し十月桜咲く

文化の日フランス料理に竹の箸

落葉降る音は人来る音に似て

紅葉づれるもの一つに京干菓子

二百十日幼稚園児の咀嚼音

十月の昼の密会目白駅

秋雨や肩叩かれる渋谷駅

腹這ひで読むバルザック小鳥来る

鯛雲樹海にマヤのピラミッド

飼犬の躑教室色鳥来

杭一本の渡船場跡や草紅葉

縁の句座月に一献先づ祀る

庭下駄の蹴つめたき十三夜

大和 落合 絹代

川崎 堅山 道助

東京 川田 好子